

# 川口顯弘先生一人と学問—

橋 本 克 己

川口顯弘先生は昭和9年（1934）11月21日当時満州遼寧省本溪市で生まれた。「皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的鍊成ヲ為スヲ以テ目的」とした戦時教育体制の産物である国民学校5年生の時敗戦を迎えた。九州に引き揚げてきたのは1年後で、やがて、名古屋の東山公園のちかくに一家は身を落ち着いた。一期生となった新制中学2年のとき、先生は肺結核を患い生死の境をさまよった。新薬ストレプトマイシンのおかげでからくも一命を取り留めることができた。2年たって復学するもののふたたび病を發して高校での勉学は続けられなかった。病床横臥して和漢の古典を濫読し、現代日本文学に親炙する日々がつづいた。思えばこのころの体験が後の先生の人生におおきな影響を及ぼしたことは間違いあるまい。

もっとも多感な時期の死と隣り合わせの読書が、少年に小説家になる夢を抱かせたとしても不思議ではないだろう。読書が死を忘れさせ、創作が死を遠ざける。まさに文学は生きる糧であった。戦後日本の若者たちが飢えていたのは食物だけではなかった。どんな本でも雑誌でも出せば売れるという空前の出版ブームのなか太宰治、坂口安吾らが時代の寵児となった。こうした時代の空気を吸いながら川口少年は病の床に臥していたのだ。

ここで注意しておきたいのは、読破した小説群の中で先生が芥川龍之介の『河童』や『ある阿呆の一生』などにつよい感銘を受けていたことである。先生の業績については後述するが、すでにこのころから幻想と諧謔にみちた現実逃避的な芸術至上主義的文学への傾倒が見られることは指摘しておいてよいと思う。筆は一本箸は二本衆寡敵せずという言葉どおり、病は癒えたが高校にも行っていない川口青年は、世渡りのたつきを得るため名古屋の簿記学校へかよわなければならなかった。経理

1級の資格を得て単身上京したのは23歳の春であった。昭和33年、日刊自動車新聞経理部に入社。入社1年にして雑誌『日本モータリストクラブ』の専任経理を任される。しかし3年半たったころ、またもや肺結核を再発、会社を辞して療養生活を余儀なくされる。いちど取り憑いた病魔は容易に先生から離れようとはしなかった。釣り指南書のリライトや校正で糊口を凌ぎながら、小説を書けぬ自分に苛立ち、死の影におびえ酒色に溺れ享樂に耽る日々もあった。池袋をうろつく放蕩無頼の輩と交わったこともあった。まさしくデカダンを地でいく生活だった。

こうした八方塞がりの中で、先生はいつしか大学進学を考えるようになる。このころの文学青年はロシア文学やランボオにかぶれたものだ。先生も例外ではなかった。小林秀雄、辰野隆、石川淳ら、仏文出身の評論家小説家らの華々しい活躍にも惹かれた。先生は日仏学院にかよい、個人教授にもついて、猛然とフランス語の勉強を始める。そして昭和37年大学入学資格検定試験に合格。翌38年28歳のとき早稲田大学第一政治経済学部経済学科に入学した。政経学部を選んだのには父親のつよい懇願があった。息子も小説家になるのに文学部に行く必要はないと考えた。

こうして人より10年遅れた憧れの大学生活は、平凡そのものだった。肺のやまいは本復したが、かといって小説が書けたわけではない。大学4年生、ふたたび実社会の荒波が迫ってくる。晩学の大学生はモラトリアムを長引かせる作戦に出た。大学院へ進学することにしたのだ。余談だが、この拙文を書くにあたり面談の最中、話ここに至ると先生は忸怩たる面持ちで「いつも安全な道ばかり選んできた」と吐き捨てるようにおっしゃった。「これで三度目の変節」とも付け加えられた。一度目は経理学校、二度目は大学ということなのか。先生の頭の中では学校という制度に安住することはすでに墮落なのかもしれない。幼少のころからほとんど学校には通えなかったため一匹狼的な気性が生じ、集団生活や学校という環境つまり群れ集うことに対する嫌悪の念を育てたのだろう。加えて学校に対する不信感には昭和9年生まれという戦争体験者固有の特殊性もあるかもしれない。この点も先生の性格を形成する重要な因子だと思われる。いわば時流に抗する生き方は生活上でも学問上でも変わりなかった。ぬくぬくと同質の淡い色調のなかに紛れるよりも激しい原色で他と対峙することを好んだ。こうした気性は集団のなかで不協和音を奏でることもあったが、逆に言えば党派的思考から距離をおき不偏不党の孤高な境地を保つ

ためにも役立ったのだ。

かくして経済学士は大学院へ行くことにしたのだが、選んだのは文学部フランス文学科だった。主任教授はアナトール・フランスやアンドレ・ジッドの翻訳で知られた根津憲三先生だった。文学部出身の年若の同輩たちに後れを取るまじと猛勉強に励んだ。修士論文は『ランボオにおける観念の絶対化』（昭和45年）だった。博士課程になるとさっそく非常勤講師の口が廻ってきた。武蔵野美術大学、拓殖大学そして昭和46年に千葉商科大学非常勤講師となる。高校にも行けなかった蒲柳の質の、無頼デカダンを取った小説家志望の若者がいつしか教壇に立っている人生の不思議、悪戯、皮肉。立派に更生してくれたと喜ぶ厳父慈母のころとは裏腹に、先生の胸中さぞ複雑であったろう。さらに驚いたことに、先生生来の快活饒舌と熱意によって学生たちの目も輝いていた。道草寄り道が長かったぶん独学独習で苦しんできたぶん教えられることもあるかもしれない。それに教えるよろこびだって、またひとつのよろこびではないか。現実回避から逃げ込んだ象牙の塔の温室にも、花は咲き実はみのるのではないか。そう先生が思ったかどうかは知らないが、たしかに先生には教師としての素質があった、と僭越ながら言わしていただきたい。学生の教育に対する誠意と熱意は言うに及ばず、気分には左右されることなく、どんな学生にも公平に接し、ひとときも座することなく所狭しと歩き回り、朗々たる声でテキストを復誦し、教室を劇場に変えることができた。そのうえ先生の年代の教員には稀なことだが教授法に関する先鋭的な意識があった。この教授法については先生の業績のところより詳しく述べようと思う。

先生が千葉商科大学専任講師に任用されたのは昭和47年、昭和52年助教授、昭和58年教授に任命され、昭和60年に在外研究員として渡仏される。ソルボンヌ大学大学院では、幻想文学研究の泰斗マックス・ミルネール先生の警咳に接する。忠実な弟子は平成6年ミルネール先生の主著のひとつ『ファンタスマゴリア』を翻訳上木して、師の学恩に報いた。帰国の時が迫っていた。先生は、当時の学長宛に一年の留学延長願いを文書で送った。春浅いモンマルトルの、住居にほど近いカフェで、学長からの延長却下の手紙を読んだ先生は悄然と肩を落とし、苦い赤葡萄酒を飲み干したのだった。

平成11年、若手教員らの勧めもあって先生は図書館長になる。だが愛書家の先生

にとって皮肉なことに、図書館長として課せられた責務は、図書予算の大幅削減だった。学者にとって書物は命の次に大切なもの、それを削るとは何事かと総スカンを喰うのは当然だった。削減の対象となったのは主に学術雑誌だった。思えばこのころから図書館の役割にも変化の兆しが見えていた。新刊書の截られたばかりの紙にのったインクの鮮やかさ、古書のモロッコ革とオランダ紙の籠えた甘い香りを愛する者の世界に、キーボードとディスプレイからなる消毒液のごときプラスチックの臭いが混じりはじめた。予算に大鉈をふるう一方で図書館長は、副図書館長中村行秀氏とともに、学生たちに一冊でも多くの本を読んでもらおうと「図書館だより」なるパンフレットを定期的に出すようになる。教員による図書紹介や書評などがあり、読みものとしても面白かったし、教員の相互理解にも役に立ったが、図書館長が代替わりするとともにこのパンフレットも消えてしまった。

さてここで先生の学問的業績について触れたい。先生の業績は、大きく二つに分けられると思う。一つは翻訳、二つめは語学教材の作成である。外国文学研究者にとって翻訳は研究論文に勝るとも劣らない業績である。上田敏、永井荷風、堀口大學の名を挙げるまでもなく、優れた翻訳者を得ることで我が国のフランス文学は普及発展してきた。川口顯弘先生が専門とされたのは、19世紀半ばから世紀末にかけての「呪われた詩人たち」やデカダン作家らであった。理性の国フランスで長らく文学史の闇に埋もれていた幻想文学が日の目を見たのは20世紀も半ばを過ぎていた。いわば新たに掘り出された金鉱のごとき領域で、幼少のみぎり『聊齋志異』や『今昔物語』が韋編三絶の愛読書だった先生にとっては、まさに絶好の翻訳対象となった。数ある翻訳の中でも、先生がとくに愛着をもっておられるのは、テオフィル・ゴーティエ『魔女伝説』（森開社 1979年）ペトリュス・ボレル『シャンパヴェール悖徳物語』（国書刊行会 1980年）、それにご自身の編輯による『十九世紀フランス幻想短編集』（国書刊行会 1983年）の三冊である。実質的な翻訳処女作といえる『魔女伝説』は、ボオドレエルが『悪の華』を捧げたことでも知られるテオフィル・ゴーティエの第一詩集に収められており、文学史上名高いわりには祭壇に祭りあげられたまま読まれる機会が少なかった作家の、妖美ただよう長編物語詩である。『シャンパヴェール悖徳物語』の作者は、ダンディズムの化身で狼<sup>リカントロープ</sup>狂を自称し、灼熱のアルジェリアで熱射病に倒れた伝説の「呪われた詩人」ペトリュス・ボレル

だった。先生はこの作家の代表的詩集『狂想賦』<sup>ラフソディ</sup>も訳しておられ、我が国におけるペトリュス・ボレル研究の第一人者である。『十九世紀フランス幻想短編集』は、フランス文学のディレクタントたちが待ちに待った異色異端の小説集であった。新種珍奇な花々が繚乱と咲き乱れる秘密の庭園の観があるこの作品集は、全篇本邦初訳で、小ロマン派から世紀末デカダンの主要な作家たちを収めている。就中ジャン・ロラン「マンドラゴラ」、シャルル・クロ「恋に狂って死んだ小石」、シャルル・ラブー「トビアス・グウルネリウス」はマニア垂涎の珠玉の作品であった。また上記三冊ともに巻末の解説が素晴らしく、研究論文としても高く評価されていることを言い添えておきたい。

翻訳には古来より未だに決着を見ない議論がある。「不実な美女と貞淑な醜女」論争である。正確なことばは忘れたが、往古あるイタリア人作家が、「翻訳とは女に似ている。美しいときは不実であり、忠実であるときは醜い」と言ったという。現在ではどうやら「貞淑な醜女」が主流であるようだが、先生は熱烈な「不実な美女」信奉者である。じじつ、「不実」かどうかは知らないが、先生の翻訳はたいへんな「美女」である。彫心鏤骨の訳文とはまさにこれで、翻訳文学の両大家、サド研究の澁澤龍彦、『リラダン全集』の齋藤磯雄より絶賛を受けた。この点に関しては多弁を弄するより、先生が訳された一編の詩を読んでいただくに如くはないと愚考する。

テオフィル・ゴーティエ作 川口顯弘訳

ソネット1

灰暗きバジリカ堂の、とりどりの色絵硝子に  
沈みゆく太陽の火は、こもごもにうすれ消えゆく  
既に今は、遙けくも過ぎにし御代の、めづらかの形見となりし  
円屋根は、蒼ずむ空に、黒き影絵を描きたり。

月昇り、その斜<sup>ななめ</sup>なる光もて  
尖塔のとがれる針と、物憂げの松の梢を

半ばほど銀に染むれば  
その影は移<sup>うつろ</sup>ひ揺れて、四方の辺<sup>よも</sup>に拡<sup>ひろ</sup>り行きぬ。

時に鐘、鳴りわたりつつ、さながらに天の国より  
風に乗り、この地のうへに到るごとくに  
たゆたへば、その鐘の音<sup>ね</sup>は、消えがての声音にも似し。

詩人<sup>うたびと</sup>は、石のうへ、波のほとりに坐りつつ  
夢のごとくに消えゆける、その音に耳を澄しぬ  
眼は空に、想ひ出にこころかなしく。

次に先生のフランス語学への貢献について述べたい。川口先生は1996年加藤寛学長が就任され大胆な語学改革を断行する以前から、独自の語学教材を作成しておられた。まだパーソナル・コンピュータが高嶺の花で、ワープロ専用機が主流だった時代、大学に導入されたばかりのマークセンス自動採点機を駆使して、大人数教室での効果的な語学学習は可能かという難問に取り組んだ。先生は芸術上の嗜好とは裏腹にハイテク機器にも通暁しておられた。若い時分から銀塩フィルムの現像引伸し、高周波ラジオやオーディオアンプの組立にも卓越した腕をふるった。その趣味が本業を助けることになったのだ。加藤学長の尽力により、語学は少人数クラスの実現を見、改革の恩恵に浴したとも言えるが、その間われわれ語学教員に課せられた問題は多々あった。当局からは実用的な会話主体の教育法を要望されていたし、また当時最新のフランス教育学の成果であったメソッド・コミュニカティヴの採用に若手やネイティブ教員が積極的だったこともあり、われわれは慶応藤沢キャンパス、関西学院大学、同志社大学を視察し連日連夜議論を重ねた。今は亡き畏友森永徹先生を中心に、川口先生、花田先生、村松マリー・エマニュエル先生と口角泡を飛ばして議論した日々が今となっては懐かしい。こうした話し合いのなかで川口先生だけはわれわれと同調しなかった。語学の基本は文法、会話だけやっていたのではじきに壁にぶつかってしまうと正論を真っ向から主張された。こう言うと如何にも旧態依然とした語学教師の印象を受けるかも知れないが、じっさいの川口先生は

文法や発音というフランス語の難所をいかに平易に効果的に学生に教えるか常に腐心されていた。残念ながら新体制となった千葉商科大学の語学教室では実験されなかったが、非常勤で勤務されていた郵政大学校、早稲田大学政経学部では、先生が心血をそそいで研究開発された、いわゆる「川口システム」でもって、短期間に驚くほどのフランス語検定合格者を輩出したのである。これはフランス語文法教科書の定番である「丸山文法」をもとに、膨大な資料を渉猟して作られた自作ドリルであり、現在では千葉商科大学の仏検クラスでも使われて、その有効性が実証されている。それ以降も、平成15年からは文部科学省の助成金を得て、千葉工業大学の大久保政憲先生、北海道大学長野督先生と共同で「マルチメディア利用による仏検準備のためのシステム構築と教授法の研究」に携わり、コンピュータ時代にふさわしい語学教育のあり方を模索しておられるのである。

先生は平成17年3月定年退職されたが、今でも名誉教授として週2回千葉商科大学で教鞭をとっておられる。出講日には、先生の人柄を思慕する若い教員が大勢つどい、先生のワイン談義に耳をそばだて、談論風発し、笑いの渦をおこすさま、さながら十九世紀フランスの文学サロンを髣髴させる。

最後になったが、家庭人としての川口顯弘先生は、一男二女の子宝に恵まれ、御子息御令嬢みな独り立ちされた今、賢く美しくいまだ若い夫人と愛猫とともに悠々自適の生活を送っておられる。これからの御多幸と御活躍、なによりも御健康を衷心よりお祈りいたします。(2005.11.23勤労感謝の日に)